

東遊雑誌 下

（弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター所蔵成田彦栄氏旧蔵図書）

薦谷大輔

本書は、故成田彦栄氏旧蔵の古川古松軒著『東遊雑誌』全三卷（以下、成田本と略記）の三卷目にあたる。上・中二卷は、すでに本誌第一二九・一三〇号に紹介されたため、本書をもって成田本の全体像が明らかとなる。本書には、天明八年（一七八八）九月二十三日の仙台領金成発駕より、十月十八日の江戸千住自勝堂帰着まで旅の締めくくり約一カ月間が収載されている。そして、その後、古松軒による旅の回想や、松平定信に幕府巡見使への随従を命じられた経緯などを記した大尾と、旧蔵者と推定される人物による奥付があつて終わる。

さて、本誌第一二九号の解説によれば、成田本は京都・思文閣で購入されたものであり、その古書目録には「古松軒自筆」とみられる。つまり、この目録は成田本を古松軒自筆本と明記しているのだが、その根拠となったのが、本書末尾の奥付であろう。この奥付には、「古国書」に見える解題の記述として古松軒の出身・名乗り、地理学や旅への嗜好、著書などについて記した上で、「本書」（成田本）は古松軒の自筆によるもので、わずかに卷之二と六のみ残っているが、損傷が激しく、妻の協力を得て三巻に装丁し直した、とある。奥付の記述を信用すれば、

成田本は古松軒自筆ということになるが、通覧した限りでは自筆本と断定し得る要素を見出せなかった。そればかりか、むしろ写本の可能性をうかがわせる箇所が見受けられた。例えば、本書の九月二十五日に記された中村卿の和歌「うけ継し国の守りの甲斐もなしめくまぬ民にめくまゝ身ハ」とその頭註である。この和歌と頭註が、配置から同時期に書かれたように見えるのである。頭註が後世のものであることは内容から明らかであり、このような点から成田本は後世の写本と考えられる。

ところで、『東遊雑誌』は写本が非常に多く、国文学研究資料館ホームページ「日本古典籍総合目録」(<http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html> 二〇一一年九月二十六日確認)により検索されるものだけでも九十五点（抄録含む）確認できる。これらの多くは、十巻本、十二巻本、二十六巻本に分類でき、古松軒は複数の自筆本を作成して各地に広めたようである。一方、成田本は、上・中・下三巻ではあるものの、奥付等が記すように、本来は卷之二と六の二巻であったようだ。したがって、成田本は六巻構成だったことになる。しかし、右の九十五点の写本に六巻本は見当たらない。即断は避けたいが、成田本はこれまで知られてい

ない系統の写本と考えられる。このように、成田本は、『東遊雑記』写本の形態の多様性を示すものといえるのであり、今後、各写本との比較研究により写本成立・流布の意義などについて検討が加えられることを期待したい。

参考文献

青森県叢書 第三編 来遊諸家紀行集

(青森県学校図書館協議会 一九五二年)

東洋文庫二七 東遊雑記(平凡社 一九六四年)

日本庶民生活史料集成 第三卷(三一書房 一九六九年)

【凡例】

東遊雑記 上(第一二九号)・同 中(第一三〇号)に同じ。

【翻刻文】

一 東遊雑記 下

⑨ 一

東遊雑記卷之六

目録

⑩

中新田

吉岡

松嶋

塩竈明神

末の松山	多賀城碑	宮城野	仙台城下
岩沼	大河原	白石城下	越川
角田	金津	坂元	駒ヶ嶽
中村城下	小高村	高野村	富岡
四ツ倉	平之城下	小名浜	植田
上遠野	石住	竹貫	室木村
棚倉城下	東館	下関	大中村 _{常州}
大田村	枝川	長岡	府内
牛久	我孫子	千住	

東遊雑記卷之_(マ)

⑪

備中古河辰著

廿三日、金成御発駕、五里にして板立、三里半にして若柳止宿、此辺大概よし、金成村の内に観音堂あり、御巡見所なり、大同二年_(田)村丸の建立といふ、宝物品々の中に古物の面多し、甚た□□に見ゆ、また羽衣と称する衣あり、いんすの独沽_(マ)の雅なるもあり□、羽衣□称する物をよくく見しに、至て細き麻に鳥の羽を織入れし物にて、数百年以前の製と見へて至て古し、今にても製しなは随分出来すへきものなり、往古麻布も自由ならさりし世に、鳥の羽をあつめ、それを繋ぎ合せて身をかくせしより羽衣と称する、名残りしより仏家にて天の字をくはへて、埒もなきいろいろの説をいふなるへし、宝物の中に古作の面数多ある事も、古しへは舞楽の世にあまねくおこなはれし故なるへし、今田舎にて大夫と称する社人の芝居にもあらず、猿楽にもあらずして、芸を能と称し、

神前に幕をはり素□鳥尊おろち退治、天照太神宮の岩戸かくれ、この外
いろくの芸をなす、此時にかけし面のありしを幸ひとし、神作・仏作
の名□し宝物と称せしものなり、観音堂のうへに白山権現の□あり、神
体ハ菊里姫なりと別当僧のいひしなり、解しかたし、追て考て記すへし、

〔插图①〕

泰衡の首塚ハ無名のしるし石あり、扱此辺にいたりては、田畑ひろく
として五穀もよく熟し諸品ともしからず、百姓の家居も大底也、世にし
る姉齒の松も姉羽村といふに有り、つくも橋より凡一里、南北に相對せ
りといひ伝ふ、用明天皇の御時ハ、是より奥州津輕近き所に美婦人あり
て、都へ召さる、此所にてやまひに伏して死す、里人哀み山中に葬る、
その後妹をめさる、此所に来り姉の墓にまをて、つかしるしの松を植る、
土人これを姉墳松と称す、古来はいく度も枯れてうへつきし松ながら、
一抱はかりあり、雅なる松二本あり、今村の名に書は姉羽村といふ、墳
の字を忌しものなるへし、松の傍に義経腰かけ石あり、

〔插图②〕

予地理を見るに、此筋古しへの古道ならんか、今往来する街道は昔時
は沼にてもありて、其沼をよけて勝手よき方へ往来せしと思はれ、つく
も橋のかゝりし所また此道筋もむかしの古道なるへし、

資隆

かくはかり年つもりぬる我よりも姉羽の松のおひぬらんかし

用明天皇御製

古郷の人に かたらん栗はらや姉羽の松のうくひすの声

栗原郡姉羽村古しへハ墳の字、今ハ羽の字をかく、

よみ人しらす

くり原や姉羽の松の人ならば朝のつとにいさといはましを
此三首ハ案内者の覚へ書にありしを写す、解しかたき哥也、

古松軒

ミちのくの姉羽の松は誰ゆへに色かへすして世をや経ぬらん

姉羽村の内に鷹の羽の清水と称する所、自然石にして鷹の羽に似たる
所、真の羽を見るかとし、

廿四日、若柳御発駕、四里にして左沼、五里半にして柳津止宿、若柳
在町にて三百五、六拾軒、此所に沼あり、横三十間計り、長サ三十間余、
鯉・鮒・うなぎの多き沼なり、元来若柳の東を流るゝ磐井川の古川筋に
て、今に埋らさる沼なり、此辺に来りては田畑大ひに開き、幾万石もあ
らんとおもふ平地なり、九州肥後の国とおもひくらふるに、此辺は肥後
の郷中よりも勝れる風土なり、婦人の化粧もし、櫛・かんさしをさした
るも度々見掛る事にして、羽州秋田・奥州津輕・南部の在中より雲泥の
違ひあり、しかれとも六丁を以て一里とし、一丁を幾間といふ事を委し
く知る者は、人足の内には稀なり、その辺鄙なる事を思ふへし、西は
原郡石越村、東ハ豊米郡石森村、此辺の御巡見道は曲道故に、左沼もま
た栗原郡にて、また七丁計り行て豊米郡加賀野村といふに入る、左沼よ
り東三里平地といふに、仙台候の臣伊達式部知行二万石の居所にて、町
も大概の所にして家中町も長く、土人豊米郡豊米の城と称して往来より
見る所、松林の間に橋も見へて風景あり、町の東口へ北上川流れ、要害
もよき地なり、定めて古城跡を取立し館城なるへし、北上川をわたりて
少し行けハ、西ハ豊米郡日沼手村、東ハ木谷郡黄手村、柳津より一里半

なり、

廿五日、柳津御発駕、三百五、六十軒の在町なり、三里半にして辻堂村、三里半にして在町なり、石の巻止宿、郡界、西は木吉郡柳津、東は桃生郡檜崎村、辻堂村よりは北上川の堤を通行して、石の巻へ三里半南へと下る事なり、北上川此辺にて股となり、一流ハ石の巻に落、一流ハ十三浜・十五頂などいふにおちて海に入る事也、辻堂村と石の巻との間郡界あり、北ハ桃生郡北堺村、南は杜鹿郡南堺村なり、辻堂村より郷中大ひにひらけ、田畑のもやう上国に見へ、人物言語もよくなり、寒気の事たつねきゝ口に、雪も大ふりといふ節にても、式尺はかりのうへはつもの事なしといふ、初にいふことく、雪は山嶽のかまへによりてつむものと思はれ侍る也、然とも北方によりし国ゆへに草花・菜物取上方筋とも節も違ひ、また暖気おそく蘭を初とし橘の類たへてなき所にて、いまた行程名所・旧跡の事を知る人稀にして、此外に至るまで不調法に見る事まで多し、

此辺にては橋に左のことく間々をあけて飛石をのせるやうにして橋をかけた^{つゝ}り、勘略^{かんりゃく}の橋は中々利方にてよきもの也、

【插图③】

川舟の造りやうにも見馴さる舟あり、又石に土人柱石と称して八寸角・一尺角にして、一丈も二丈もある自然石数多ある事にて、材木をつみかさねしやうに見ゆる山あり、石の色は青く堅き石也、又ひらにへけ^{へま}バ奥のことくへける石もあり、少し青色の石なり、世に珍らしき石もあるものなり、

石の巻は奥州第一の津湊にて、南部・仙台の産物此地へ出て江戸につ

ミ、大坂へまはる故に、諸国よりの入舟あまたにて、繁昌のミとなり、案内の者より申上しは、市中千四拾七軒、寺院十八ヶ寺、社十一といひし処なから、湊村・鰐田^{うで}村といふ所にてハ、予かつもる所三千軒余もあるへし、倡家も数軒見へ、人物・言語も大概よき所なり、鹿嶋の御巡見□にて金花山をは御遠見ある□なり、さして名所・旧跡と称して見るへき所もなく、風景ある地にもあらず、山より遙に海上をみれ者、蒼海へうくとして大浪白雲にましはり、何となく哀をもよほす情あり、晴天にハ此所より金花山を見るといへとも、此日ハ天気よろしからずして金花山見へず、僅の行程ながら御用先ゆへ、一晚に行事も心に任せず至て残念に思ふ事なり、赤水先生の日本の地図を出し見れハ、奥州東方の海浜にさしての出崎・入海ハなきやうなれとも、此山上より見渡せは、出たりはいたりの出崎・入海かきりなき事なり、広大の国なれ者委しからぬも無理ならぬ事と思ひしなり、鹿嶋の宮のかたはらにはせの句を石に彫刻してあり、西国からぬ句ながら記し置ぬ、

雲折々人を休むる月見かな

扱此地を石の巻と称する事ハ、北上川の水底に兜石といふ兜に似たる大石ありて、早魃の年には少し見ゆる事なり、此石を取まさせし^{つゝ}処とて石の巻といふよし、案内の者申上し事なり、北上川ハ先達而聞しとは大に違ひし大河にて、川幅も広く水深し、千石の船帆をかけ何方へも勝手よき所へ走りこゝろ任せの川なり、

新後拾意

袖の渡り

陸奥の袖のわたりのなみた川こゝろのうちになかれてそすむ

名所の真野萱原片葉の芦□いへる地は、杜鹿郡真野村といふなり、金

花山へ参詣すれば道なり、此地へハゆかす、

続古今

またミね者佛もなしなにかも真野の萱原つゆミたるらん

古哥多し略しぬ、土人のいはく、後醍醐帝弟八皇子茂良親王の御事跡、御所の入江といふ地有と物語りせしなり、此所へも行す、

石之巻は仙台第一の湊なり、北上川は日本七大河の其一ツにして、千石の中に兜石と称する石ありて、此石をもつて石の巻といふ、市中三千余軒、倡宿もあまたありて繁昌の所なり、

〔插图④〕

袖の渡

鹿嶋明神社を土人かしま御子と称す、金花山は此所より所役人^{ついで}出て、金花の事を委しく申上書付て呈せり、石の巻より金花山ハ辰巳に当りて、陸十里余、海上十六里、

石巻より仙台城まで十三里十町、松島へ七里半、金花山への行程前のことし、

石の巻産物多し、中にも鮭の子籠・かれいを名物とす、扱此所まで来りて金花山へ至らざる事生涯の残念にて、いかゞせんと終夜案しわつらひし事ながら、御用先の事故いかんともなしかたし、此地より人々にわかるゝ事も心に任せず、せひなく思ひし事なり、然るに御宿のあるし中町清兵衛といへる人は、此地の長にして風雅もあるゆへに、両度まで金花山見に行し人と聞し故に、嬉しき事に思ひ、念比にたつね聞て左に記せるものなり、金花山ハ山の形宝珠のことく、浪打きはの形は亀に似たり、蓬莱山とも称すへき形なり、他国にいふ処は、此嶋には黄金満々、

参詣の山道砂金なりといふ事は甚しき虚説にて、山中においてはさらに金色の石なし、麓より山の頂にのほる所曲道にて四十八丁、山廻り三十六里といふ、此事ハ古しへよりの言ならはしにして、三十六町道にもあらず、また六町一里にもあらず、大概を称するのミなり、八方の谷八十八浜、洞数三百四十四穴、是ハ古し□黄金石を堀し穴と見へし、此穴に深く入れば、黄金石を拾ひ得る事なり、しかれども当山の権現とる事をおしミ給ふとて、今は穴に入る事をゆるさず、たまゝ他国の好事家より頼み来りて黄金石を取らんとおもへは、別当をもつて初尾を捧けて少し黄金石をもらふ事にて、たやすくは得かたし、いつの時にや有けん、盗賊数人穴に入りて黄金石を数多取り、真の黄金と思ひて石の巻に持来りて売見しに、真の黄金にはあらず、金箔石なれハ誰ありて買ふ人もなかりし故に、餅・酒の価にあたへおきてかへりしといふ、至てひかり強く黄金のことき石也、山上には天口大権現と号して弁才天を祭るともいひ、また蔵王権現の安置せるともいふ、未だつまひらかならず、扱此山より遠見するに日本の東はるかにして、目にさへきる嶋・山もなく、海まゝくとして天にまじはるのミなり、東南の間に八丁はかり下りて、福祥石と称して粗八角の水晶あり、高さ数丈、周り十三尋、当山第一の宝石、権現の宝珠といふ、しかれとも日かけにて苔ふかく生して、見る所はさしに水晶のことくは見へず、参詣する人の指先に砂をつけ、苔を生せしのミなりといふ、予思ふに水晶ならは磨すとも光りはあるへきに、数年指にすなをつけてすり磨きし所のミに光りを出し、外ハ平生の石のことしと、何れハ不審なる石なり、も「ハ玉ならんか、玉磨かさる者光なしといへ者、玉ハ水晶・石英・□々は異にして、磨かさる内ハ

常の石にて目利のあるものなり、「」は寺院も四十八ヶ寺、社頭もありて繁昌の山なりしに、戦国の時に此山には眞の黄金もある事に思ひて、討もらされの卒兵度々渡海して寺院に入り、僧侶を殺害して乱取せし故に終に滅亡し、久しく住む人も参詣の人もなかりしに、慶長年中の頃にや、京都岩倉の僧威藏坊長峻といひし僧、名高き名山のたへし事をなきて、此嶋山にわたりて再興ありしより、今のこづくに諸所より参詣の人もあるよし、別当大金寺長峻の開基にして聖武帝天平宝字廿一年、当山より黄金をはしめてさへけし事、世人のよく知れる事、土人云伝ふ、金花山の東凡三十余町沖の方に「ク」あり、羽州・奥州にては海底に岩のあるを「ク」といふ、上方中「□」にては「ク」ハヒといふ、「□」ともいふ所あり、其中に黄金石の龍の形に似たるありて、廿年か三十年かの間にいかゝの事にや、汐の大ひに引事あり、其時に金花山よりミレハ、龍のかしらとも称すへきもの海上にあらはるゝ事なりといふ、予按るに黄金の溢れ出しものか、すべて此海上にてとる海鼠ハ背に金色ありて、他国の海鼠とは大ひに異也と物かたりなり、奉納し給ふ、予も其写しを見しに、面白き事に覺へし事ながら、旅中の事ゆへ写し得る事もならず、略せしなり、其中なる一首を記すのミ、

中院通躬卿

うこきなき国のさかえはいまもさくこかねの花をミちのくの山
吉村卿と称せしは、和哥のミならず、賢君なりしと亭主の物語りなり、其頃いかゝの事にや、役人より御領分の豪家なるの者ともへ用金をかけし事あり、吉村卿是を聞給ひ役人を御前へ召れて仰ありけるは、上よりハ下々の者をはめくみあはれ無こそ順なるへけれ、百姓へ用金などを申

付る事ハあるましき事にて、賤しき物にても恥へき事なりといひて、役人へ御哥を下されしといふ、

うけ継し国（*頭註）の守りの甲斐もなしめくまぬ民にめくまるゝ身ハ

（*頭註）「江戸將軍吉宗公の御製、うけ継し国のかさのかひもな
くあら」「此にめくまるゝ身ハ、右御製と大同小異のミ、予ハ

土人のあやまりなるへし、古松軒まちかひる、」

今ハむかしにかはりて百姓の体御覽の通りなりといひしなり、

廿六日、石の巻御発駕、四里にして北村、箱泉寺と称する真言寺あり、御巡見所なり、御三所とも此所にて休み也、さて此箱泉寺ハ慈覚大師の開基にて古跡所なり、宝物さまゝあり何れも不思議の物語数多なり、目前になきふしきを住僧勝手よきやうにいふもおかしき興ありて、一
笑せしほとなり、庭に高さ一丈余の栗の木あり、是をしたら栗と号して、慈覚大師この栗の木へ袈裟をかけ給ひしによりてかくの通りにしたれしといふ、いかにも柳のこづく枝たれし栗の木なり、此外の事は目前になき事ゆへに略しぬ、石の巻より北村のあいた、広淵村といふ所に方三十余丁の沼あり、広淵村といふ所を過て郡界あり、桃生郡北村・走田郡谷地北村、谷村といふは大村にして枝石数多也、此所にも大沼地あり、名産鮒にて一尺七、八寸、二尺はかりの鮒をとりて御馳走に出せしなり、大鮒ハ甚た見事なるものにて、此目北村より二里余涌谷村止宿、
廿七日、涌谷村御発駕、志田郡古川村川あり、土人玉造り川といふ、案内の者の覺へ書は、

小野小町

すへ入るゝ玉造り江にくくふねの音こそたへぬ君をこふれは
和歌には江ともよしや、当国ハ名所なりといひし川なり、仙台騒動

記にしるせし、忠臣伊達安芸の在所脇谷の館といひしは、玉造川の西に在て往来よりは見へず、古川村御やすみなり、此所ハ三百四拾軒はかりの町にて、町の中ほとに小き土橋かゝれり、名所の緒たへの橋といふなり、予考ふるに、実跡と思はれず、古しへハ玉造川此所へ流れし事にて橋のありし也、今見る橋ハ流れに渡せし橋にはあらず、

後拾意

左京大夫道雅

みちのくの緒絶の橋やこれならんふ見ふますみこゝろ迷ハす

定家

白玉の緒絶のはしの名もつらしミたれて落る袖のなみに

順徳院御製

東路のおたへの橋もあるものをいかにくち行袖とかはしる

此外古歌多し、

〔挿図⑤〕

塩竈浦仙台城下より五里すへて信達の二郡は旧跡^(多力)し、宮城郡にもこゝかしこに名所あり、しかし古名をうしなひ宮城野など定かならず、

此所ハ塩竈明神の社頭もきれいにして浦の風景よし、是より松嶋への海上二里、天下無双の勝地と世に称する所也、


遠田郡 鶴坪村 志田郡 下埜村

志田郡 加美郡 櫛塚村 新堀村

古川村ハ志田郡なり、

此辺大ひに入組、北加美郡・北黒川郡・大谷郡ハ黒川郡の分郡也、混してあり、南黒川郡大瓜村・南大谷郡ハ今の世に大なる郡村、分郡せしといふ、

廿八日、中新田御發駕、四里にして吉岡、三里にして松嶋止宿なり、

吉岡在町にて仙台候の家老何某の在所也、仙台候の家士千石以上の士土着□て在宅する事にて、たとへその人在所の居住ならぬ身にても在所持にて、また家来のかろき者また士格の人ハ門かまへ武家と見ゆるやうに建てあり、ひらき門を建へきやうもなき貧士は、〔挿図⑥〕かくの

こときの木戸門を建て、武家のしるしとする事なりと、委しく土人の物かたり聞ハ、今にては氏もなき百姓にても、身上よけれハ御用金を度々上納する家には、右の木戸門を御免ある事にて、金次第にて歴家となる事なりといひき、是らの事ハ「
」もまゝある事にて、中国筋の百姓金次第にて帯刀するに同じ、領主も百姓も金次第にて格式を売買する風俗、百年ほど以来の事なるべし、金銀ほど尊き物もなく、恥かしき事もあしき事も生ずる物也、松嶋より北七、八町に高城といふ村あり、此処は塩浜数多にして此地へも汐入のもやう一かたならず、松嶋より北の方にある嶋々見へわたり、其景いはんかたなく、僅なる所を見て人々肝をけし、明日は松嶋一覽とよろこひし事なり、

奥州松嶋の略図

図する所東西凡五里、南北二里余を、紙面狭く彼所に略し爰に縮む、此故に齟齬多く見る人案すへし、

一とせ赤水先生此地に下りて、

松島奇絶多 登楼月下看 夜深猶未寝 遮莫海風寒

思ひ出せしまゝ記し侍る、予絶色に感して、

朝またき明ゆく空を松島や雲よりうめる沖の嶋々

松嶋は世に知る天下無双の勝景、海面は落葉をちらせしことく数百の

嶋々かきりをしらす、隈浦奇峯或ひハ布袋・毘沙門の像に似たる嶋、或ハ大黒・多ひすに似たるしま、または屏風を建しこときもあり、甲冑のかたちある嶋もあり、中にも雄島・籬ヶ嶋・千貫しま、殊さらにしてなか／＼筆の及ふへきにあらず、すべてうつし画になす儀ハ、其地の景色よりも一しほすくれて見ゆる物□から、松島の景においては、雪舟・永仙再来して写し得ると□画しかたかるべし、予か図する所まことに九牛□一却而人を欺くとやいはん、しかれども松しまにおいては、板となし旅人に売る所の図ハ、辺鄙なる故に埒もなきものゆへ、せひなく案内の者をまねき、爰かしこと尋ね聞、または御馳走役人の所持ありし覚へ書などを見て、嶋々浦々の名をしるし故に、図中に書もらせし所多し、土人の物語には、十四、五日もめくらされ者見つしかたしといへり、云伝ふ、西行法師この地に来り、はるかに海上の風景を眺望し、我此処の景を見尽さんと欲せは爰におひて終るへしと、半にして奥のかたへ行しとて、其処を今西行戻りと称す、定めて俗説の事ながらも絶景称誉のあまりをいひしものなるへし、昔時よりも丹州天の橋立、芸州厳島、此松島とをして本朝の三景とす、ア、愚眼なるものかな、橋立・いつく嶋をならへ論すへき松嶋にはあらず、予山水の癖ありて諸州をめくり、予か見る処の風景をもつて考へ思ふに、富士山・田子の浦、及び清見か関・三徳ヶ崎の風景を日本第一とし、基にたとへていはく松嶋の景に四、五目も劣るへし、それより薩州芸州坊の津の海辺、丹州天の橋立一雙として、松しまにおとる事九目もよはかるべし、筑州箱崎の海面、海の中道と、播州須磨・明石、淡路しまの眺望とを一雙とし、坊の津・橋立先にせんはかりも劣るらんか、是よりして羽州象潟・いつく嶋・紀州和哥浦・□

津住吉浦・薩州桜しま・豊後佐賀の関・肥州虹か浜・玉崎川の風景、豊前文司か関より内裡柳か浦、及び長州赤間か関、羽州鳥海山・月山、奥州岩城山の雪景、雲州三保か関、弓の浜の海上、勢州二タ見か浦、備後鞆津より伊予路のなかも、江州琵琶湖の浦々、淀・伏見八幡・山崎、淀川の流れ、長柄・難波津のけしき、これらの景におひては人々の好む所によりて勝劣を論すへきもあらんか、山においては富士山に論なく、景におひては松島に論あるへからず、

瑞岩寺、此寺は慈覚大師の開基にて、円福寺と称して天台宗の寺なりしを、法心和尚再興ありて禅院となる、法心和尚といひしハ、此世に知る真壁の平四郎と称せし人、壮歳にて出家し、

〔插图⑦〕

文墨をしらす、商船にたよりて宋の世中華にわたり、仏鑑禅師の弟子となり、九年の後帰朝して徳をあらはせし人也、今ある所の寺院ハ伊達政宗卿の建立にて、善尽し美尽して座敷のこりなく金はり付にして、僧の雪舟、狩野元信の画一しほ目をおとろかしぬ、詞堂（ついで）には慈覚大師の作仏毘沙門天を安置し、傍らに政宗卿束帯したまふ像あり、高さ五尺余、片眼ハすかめに作り、威ありて猛からず像にて名人の作と見へしなり、いひ伝ふ、政宗卿は片眼なりしと像を見て其実を知れり、□の次に法心禅師の像、円満国師の像、円症禅師の像、おの／＼長四尺計、くり・方丈に至るまでも念の入し普請にして、寺のもやう城州宇治の黄はく寺に粗似て小なるものなり、本尊は天竺仏の阿弥陀如来にていろ／＼の妙説を云、楼門の額には瑞□円福禅寺とあり、山号は青龍山と称して、寺領二百五十石余、寺下十三ヶ寺、何れも大概の寺院と見へしなり、楼門を入

りて左の方に石窟ありて、北条禅師門の事跡をいひ、すへて松嶋の山々は石にもあらず、土にもあらず事にて、山の傍らに建る寺院には窟あり、至て和らかなる石山と思はれ、市中を往来する道々切開て通行する所見ゆ、山々嶋浦のこりなく、松樹ハしけりて雅なる大木多し、此故に松しまといひしなるべし、其松一本にても上方筋にあらば人々称誉すべき松なり、瑞岩寺西のかたに円通院といふ寺もよき寺院にして、子候越前君の影堂あり、束帯金甲を着し給ふ像あり、長四尺計り、越前君と称せしは、藩か祖政宗卿^{中納言}・忠宗卿^{少将}・光宗卿^{侍從}君也、此外の寺々も古跡にてしるすにいとまあらず、五大尊堂と称す口は、昔時秀衡建立の事跡、此嶋に高サ一丈余の碑ありて妙覚庵頼賢庵主行実の銘、一山の書、是より見たす所の嶋々諸堂とミへ、中々書尽すへき事にはあらず、汐まちあらんとて、御巡見使御三所、政宗卿の建立し給ひし物見の亭に入らせらる、此亭は城州伏見の聚楽にありしを、秀吉公より政宗卿の拝領ありて此処へうつし給ひし亭にて、其結構いはんかたなし、此処より見渡す所の海面に残りなく大概ハ見ゆる事にして、其風景汗を消し感称するもあまりあ口し事也、赤水先生此処にての詩に、

遠游滄海上 一葦信風来 東北山川尽 乾坤島嶼開

人家夕陽外 仙事白雲隈 縦有王維手 奈何写得回

四ツ時前、汐満て御三所御舟に乘らせられ、塩竈浦まで二里半余、海上の諸嶋御覧ある事なり、御船ハ仙台候御召の楼船にて、黒白赤黄のまん幕打まはし、五十挺立の艀に引ふね数艘かこひ、船うたをうたひ、艀拍子をそろへて漕出せし風情、浦々島々の気色取りましへ何といはんかたなし、供舟の馳走役の船數十艘相しるしのぼりをひらめかし有さま、

海上に紅葉を散らせしことく見る人目を驚かせし事なり、誠に天下泰平にして、草も木も上の仁徳に化し、かく迄も御威光の厚き事やと有かたくも感し侍りし事也、予かとき賤しきものゝ舟にも、案内の者式人傍にありて、彼嶋ハ何と称し爰の嶋はかく申、事跡までも物語する事なり、松しま海岸より凡海上方卅余町ハ瑞岩寺境内の界有て、殺生きんせいの海上なる故に、水鳥数千羽浪にうかミ海魚人をおそれず、船の側を浮遊し言語に絶せし風景、海内にもか「一勝地もありし事やと忙然としてものいふ人なし、すへて此海面は海を浅くして、何れの方へ船をのりめぐりても深き所ハ更になく、舟より海底をのそきみるに凡深き処五尺余、浅き所四尺はかりなり、海きよきゆへに海底あきらかに見へ、所をかへて前後左右を見れ者、はしめ見しとは風景うつりかはりて、他方に行しやとうたかわれ、筆にもことにはにも尽しかたき所なり、聞伝ふ中華西湖の地、絶景にて海浅しといへり、此松しま西湖に劣るへきにあらず、予思ふに、かゝる遊興生涯のよろこひ、又まじき事ながら牛の尻よりも鶏の頭とやらん、人にしたかひし身ハ自由ならず、一とせ九州一見に下りし修行ゆかしく西行・能因のむ口し、近き世の宗祇・芭蕉の心中も思ひや口れて頼もしくおもひし事也、事なかきゆへに爰にあらくしくしるし置もの也、

俊成

鴨長明

家隆卿

見せはやなを嶋の蟹の袖たにもぬれにそぬれし色ハかわらし
立かへりまたもきて見ん松しまやを嶋の間や浪にあらすな

松嶋や汐くむ蜚の秋の袖月者物おもふならひのみかハ

よミ人しらす

秋の夜の月やを嶋のあまのはら明かたちかき沖のつり船

忠教

心ある雄しまの蜚のたもと□な月やとれとてぬれぬ物から

ふミ分て渡りもやらす柴のぬし藤咲かゝる松しまのはし

いさり舟離のしまのかゝり火に色見へまかふところなつた花

右の外二古哥数百首爰に略しぬ、いつの頃にや会津の人よめるとて案内の物語し哥に、

しら浪のよるともしらす松しまや月の戸さゝぬしのゝめの空

また芭蕉の句を石に彫刻してあり、

朝よきを誰松しまそ片心

世々の名哥おほく、予かこときの哥よむへきにあらされとも、見る句の歌よますへきな□□にたへかねて、たゝ有へきまゝをよみ侍りぬ、

霧はるゝ雄しまの松の木の間より汐くむ蜚の姿をぞ見る 古松軒

さて松しまの茶店ハ殊の外見くるしき所にして、家居ハ木の自由処にてよき家も見ゆれとも、壁なともくつれうちも貧しき体なり、ちかき寅卯の凶年にて人民飢渴し、夫よりしてかくなりゆきしとの事なり、上方筋にあらはいかはかり繁昌すべし、辺鄙の地をおもふへし、小嶋めくりおほかたおはりて、八ツ時過塩竈浦へ御着船なる、此浦むかしにかはりて船入浅く、やうく船の通行する事にて、所々に柱を建てしるしとせり、海面清浄ならす入江く沼のことくにて見くるし、町にあかりては松嶋の町よりハ大ひにすくれ三百余軒あり、町の間に塩筒尾命の社あり、

側到大釜四ツあり、社人出て案内していふ、古しへ此釜にて明神塩を焼給ひし物かたりをす、釜中に水あり、いかなる旱魃にも涸れすして、眼病をあらへは治すといふ、側へはよられぬやうに柵ゆひまわし、戸をひらきて側による事なり、かくのことく下は土中にうつめてあり、

【挿図⑧】

予手をさし入て見しに、深さやうく五、六寸ばかり、所々われてある所を連石を以てもらぬやうにし、釜四ツを四ツ目のことくすへてあり、釜中の水に汐のさし引あり、社人恥かしき体もなく御巡見使へ申上しもおかし、世の中にもかゝる埒もなきものは多き物なり、予按するに、陳釜の底ぬけしを土中に埋め、夫に連石して水を溜しものなり、東都の鍋屋には底ぬけの大釜はあまたあるものにて、珍しからぬものながら、此処の釜ハ至て古く見ゆるは、是こそ頼義・義家公の当国征伐ありし時の陳釜と称しなは頼もしかるべし、実ハ陳釜ならんものなり、土人のいふ塩かま、是本ハ七具の釜なれとも三具ひかれて、四具の塩かまは此処にあり、残り三具のうち一ツは釜ヶ淵の海底にあり、一ツハ仙台の城下南木町の浦、真福禅寺といふ寺の池の中にあり、今一ツの釜はある所しれす、何れも明神の塩をやり給ひし釜ゆへに霊ありとて参詣せる人ありと云々、

我せこを都にやりて塩かまの

籬かしまの松そ恋しき 　　よみ人しらす

明暮にまかかしまをなかもつゝ

ミやこゆかしく音をのミそなく 　　信明朝臣

秋霧のまかかしまをへたてにて

それとも見へぬ千賀の塩かま

権大納言
実重

夕くれに蜚の篝火見へつるは籬か島の榮なりけり

右同

いさり船籬かしまの篝火に色ミえまかふ常夏のはな

右同

我思ふ心もしるしみちのくの

千賀の塩かま近つきにけり

山口の女王

右之外古歌多し、略し侍りぬ、

塩たれし昔のあとをけふ爰に汲てそと思ふ千賀の浦浪 古松軒

塩竈大明神味耜高彥根命アチカハヒコノミコトにて当国一の宮なり、社頭花美つやにして別当

を法蓮寺といふ真言宗の寺なり、社家あまたにて春□阿波守・阿部出雲

守・鈴木因幡守三家を以て頭とす、社領十五貫文、神供料十七貫文、都

合三十二貫文、仙台侯より御寄附あり、相伝ふ、当社の明神初めて塩を

焼く事を民におしへ給ひしといふと、別当を塩の翁と号するあり、此翁

の塩を焼し事にや、定て社伝にこそ委しかるべけれ、爰に記せるは案内

の者のいひしを少しく記し置ものなり、此社より安産の守り札出るなり、

詠むれば八十嶋かけ浅みとり霞そたてる塩かまの浦

此哥より称せしものなるへし、案内の者の物語りに、末の松山は街道

より少し山の頂き見へて僅はかりのよりなり、是も宮城郡のうちにて、

本の松山・中のまつ山・末の松山と称し小山三ツならびて、中にも末の

まつ山低し、この地を八幡村といふ、寺あり、末松山崇国禅寺と号す、

則此寺山末の松山なり、相伝ふ、いにしへ深くちきりし夫婦の者ありて

いはく、もし此山を浪のこすことあらは夫婦の中ハワかるへし、さもな

くはかはるましとちきる、其後遠く此山をこすやうに見へて、かなしみ

なけきしといふ事也、

ちきりきなかたみに袖をしほりて末のまつ山浪こさしとは

浦遠くふり来る雪は白波の末のまつ山こすかとそ見る

松山とちきりし人ハなれならて袖こす波に残る月かけ

霞たる末のまつ山はかくと浪にはなるゝ横雲のそら

〔挿図⑨〕

右の古哥おもしろき事ならずや、

此図案内の人の所持ありしを写し侍りぬ、

またいはく、塩かま浦より西南の間にあたりて、三十六丁道二里二沖

の石村といふあり、このむらに八三郎といふ百姓の庭に、沖の石と号す

る雅なる石あり、石のまはりは泉水にて此処へ汐のさし引ありしといふ、

海へハ十八、九丁もあり、ふしきの地なりといへり、松嶋一覽の人ハ、

松嶋より塩かま、沖の石むら、末のまつ山と見て仙台の方にまはれば、

名所・旧跡残りなく一覽する事なりといふに、末の松山・沖の石村の二

ヶ所へハ行す、残念く、

奥州宮城郡□川村多賀城跡壺碑之図

「一」高サ六尺五寸、幅三尺四寸、内四方卦四尺五寸、幅二尺八

寸三分、

塩竈明神より此地へ三十七町、仙台の城下へ往来する街道筋にて、道

の傍らにしるしの石あり、左のかたへ二丁の寄りなり、右の碑石を今は

方一間の堂を建て其中に入れ、三方よりのそき見るやうに格子をして、

旅人みたりに側へよられざる事也、此日は御巡見使の事ゆへに、戸ひら

きて案内の者二人出て、むかし物かたりに埒もなき事あまたにて、興共

なりし事にて一笑せしなり、日本風土記に曰、陸奥国宮城郡坪之碑は、

在鴻之池、今鴻の池といふ処しれす、為故鎮守府門の碑惠美朝臣朝獨建（マ）て、見雲真人清書也、記異域本邦之行程令旅人不為迷途、

〔插图⑩〕

多賀城之事「」て（マ）以下同続日本記、聖武帝天平九年夏の四月の記に見ゆるのミ、神龜元年は則聖武帝の元年にて、今年天明八年までは千八十四年になる、天平宝字六年（マ）寅ハ則廢帝の四年にて、今年天明八年まで千四十六年になるなり、

みちのくのいはてしのふはゑそしらぬ

書つくしてよ壺の石ふみ 右大將

水戸赤水先生の考を聞しに、常陸の国界名古曾の関より、今ある碑石まで記しある四百十二里は古しへの六町一里なるを、今の卅六町一里にして六十八里廿四丁なり、是にては二十里の違ひありてその不審多し、多賀城の碑を胆沢郡に置いて見れ者、常陸の国界へ六十八里ありて、古道の四百十二里に当るなり、是にては下野国界遠くなりて、碑文の行程大ひに違ひありて又うたかひあり、しかれとも古しへハ今の白川関者国の界にはあらずして、信夫郡に至りて下野国と奥州との界にて伊達の大木戸をもつて両国の関とす、是にて見れば行程四十五里余にして碑文に合ふなり、多賀城ハ胆沢郡にある鎮守府なるを、後世の風土記に宮城郡市川にありと記し顕せしによりて碑文の道距相違となれり、何れの時にや胆沢郡にありし碑石を今の地へ移せしものなるへし、南部尾山にある千引明神の社中に埋みある碑石こそ壺の石ふみにして、今世にいふ壺の碑は多賀城の門碑なり、予此事を先達て聞しにより、南部北郡尾山村、坪村、石文村に至りてせんきせしに、真の石ふみある地は千引明神口境内

の土中に埋れあるに極まりしなり、続日本記・風土記を後人の著述といふるを知らざるゆへに誤りしものなるへし、風土地（風土マ）地今はなし、やうく豊後・尾張・奥州のミ「」ひて作説多き書にて、和銅七年より六年の撰といふ、此説によれば多賀城創立以前の事にて多賀城の碑を載すへきにあらず、風土記に載たるまゝに民部省図書帳といふ書にも載せてあり、何れにも信しかたき事なり、追而考ふへし、

（マ）高城の古城市川村に在り、文治五年、頼朝卿奥州征伐の後、伊沢左近將監家景をして奥州を守らしむ、子孫相統して上野介政景の代に伊沢郡に移る、是よりして此地荒野となる、土人今国司ヶ館と称す、

多賀城国府ハ未詳、土人云伝ふ、市川村より北に別府本郷といふ所あり、仁明帝承和十年秋九月、陸奥に鎮守府を置、是府の初なりと云々、続日本記に府在とあるは府外の市町の事也、□名所・旧跡見まく欲して老体をかへりみす、千里の道もいとほすはるく此国へ来りし事ゆへに、心をとどめつくく此碑を見しに、不審すくならず、石において新古ハなき物ながら、堂に入れ雨露に濡れさるやうにしてあるゆへにや、石新らしく見へ、石質も至てあしき石也、碑文のある方は石摺に度々する事故ニ、黒くして石の質ハ見へす、後の方ハ亀の甲のことに高く、厚き処にては一尺五、六寸もあるへし、凡かまほこ形の石にて、色は赤いろを帯てあらくとせし自然石の亀末なる碑なり、上古ハ万事かくのこときの風俗なりし事にや、

上方・東都に於ても碑文正面摺は価値しからず、予もかねてハのそミにも思ひし事ながら、碑文の彫刻せし所を委しく見るに、今ハ彫刻せし文字甚た浅く、いかなる妙手なりとも一字も消へさるやうには正面摺に

ハなるへからず、案内の者に聞は、御領主御用の節ハ役人來りて念入れ摺る事ながら、碑文の文字ことくく明らかに見へるやうには、十枚にて一枚も出来かねるよし、尤の事也、しかれ者世に売買する処ハ壺の碑の正面摺にハ偽者多かるへし、察して知るへし、浮島、此処を浮しま村といふ、此地松嶋より近しと聞しか行す、残念なりし、

塩かまのまへに浮たるうき嶋のうきて思ひのある世なりけり

塩かまの浦の干潟の明ほのかすミてのこる浮嶋の松

慮の橋、雨谷村といふ所少しき土橋といふ、行かす、

吹てゆく紅葉のにしき散敷て人もかよはぬおもわくの橋

世をうしと鳶のほそ道踏分てしはしとたのむおもはくの橋

野田の玉川、慮の橋の傍にある川と云ふ、未詳、

夕されハ汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり

みちのくの野田の玉川見たせハ

汐風こして氷る月かけ 能因法師

五月雨に夕汐なからみちのくの野田の玉川浅き瀬もなし 順徳院

十符の里、此所も遠からずと云伝ふ、古しへこの地に十符の菅薦をもつて名産とす、

みちのくの十符の菅こも七ふには君をねかして三布に我寝ん

玉田横野往来より近し、田原村といふ処の野原の名なりといふ、右浮しまよりして行法、我俣の旅中ならすして見のこせし事くれくも残り多し、案内の人の覚へ書をかりて写しぬ、名のミにして是そと見るへき所もなしといふ、予按するに、此近辺には名所旧し、古しへ国府のありし処ゆへに、都人下向して此地に止りて、和哥などを残せしによつて名

所となりしものなるへし、

右の外にも小鶴の池、つゝしの岡と云処ありて古哥多し、爰に略しぬ、宮城野は仙台の城下より東、松島へ行程^往來にて、今見る処なしといひ伝ふ、昔時此野に木萩繁茂せしを哥杯によみしより名高き名所となりぬ、今は木萩絶てなく、此処の木萩の種、外にハ写しとりてありといふ人もあれば、虚説なり、仙台に筆の軸とし木萩にて名産なりとて、旅人土産に求てかへる、名のミにして木萩ハなし、

さまくの心そとまる宮城野の

花のいろく鶴のさまく 俊頼朝臣

嵐ふく風ハいかにと宮城野の

小萩かうへを人のとへかし 赤染右門

九月晦日夜四ツ時、仙台城下へ着す、是まてははるく来りつゝ、家中城下委しく見すして出立せん事も有ましきほとにと思ひければ、人々の休息せしに、予ハ人足の者をたのみ忍ひくに一見にめぐりし事なれとも、所々に番人居て自由にみる事ならず、夜の事にて委しく見る事を得ず、やうく案内の人をまねきて聞し事也、扨仙台城下ハ先達て聞しよりハ大きにちがひ、草ふきの小家ましりの町々、見るしき所数丁あり、町の長サ五十余町、往来筋にても町内には小石数多ありて河原のことし、御巡見使夜に入りて御着ありし故に、家々よりあかりを出せしに、挑灯ハまれにて角行灯の古き多し、是等を見ても町内の困究を察せしなり、六、七年以前の寅卯の凶年には、下民あまた飢渴して死せし事にし、て、むかしの形ハなしと土人のいふ也、はせをの辻といふ町二、三町ほどよく見へしなり、大年禪寺、麻布公建立、鉄牛禪師の開基にして、仏

殿・回廊・諸堂ことくく全くして、山内に麻布公・中山侯・開山師の墳も有、よき寺なりといへり、瑞鳳寺は藩祖政宗卿の祠堂ありて、甚た結構美を尽せし寺といふ、此寺天台宗なり、

万寿寺、禅宗、此寺も御鎮守御建立、よき寺といふ、

東照宮御社、至て結構と云之、

城ハ山城にして、岩壁削るかことく、一夫隘を守れ者万夫も当ることならず、金城鉄郭要害の城なりと云伝ふ、城山は昔時青葉山と称せしを、仙人松嶋より飛遊せりとて仙台城と号せり、今城中に神仙窟と称する地有りと云々、未詳、市中の名産に浮ウキはりと称して、きせる火はしに他国になき細工の名物あり、此外いろくくの産物爰に略せり、右に記することく、御用先にて心まゝに家中・市中の見物ならすして、残念に思ひし事なり、追々聞ハ、むかしにかはり大ひに衰へし事と、土人の物語りなり、

仙台に佐久間容翁、字は子巖と云し人、奥羽聞老志と題して、名所・旧跡を記せし書を著す、予未見す、佐久間氏を尋ねしに死去ありて、今子息の代なり、

十月朔日、仙台城下御発駕、五里余にして岩沼、五里にして大河原止宿、町の南出なれに広瀬川流る、宮城郡と名取郡の界とす、平生歩行渡りの川と見へし、御巡見使御通行ゆへ土橋かゝる、名所の広瀬川にはあらす、この所より南一里に名とり川流る、川は、広く三瀬となりてあり、土橋あり、名所の名とり川なり、此辺の川いづれも東へ流れて阿武隈川へ入るなり、いにしへこの川より文石出つみしといふ、古書に見へたり、ある人の説に、広瀬川ハ風土記に青葉川とあり、仙台の城山昔時は青葉山

と称す、夫より流出る川なれ者青葉川とよふなるへし、広瀬川当国の名処の川ゆへに、後人の広瀬川と替名せしものなるべし、

名取川梁瀬の沼もさばかり

紅葉のいとよせてせくらん 源重之

名とり川いかなる瀬にか顕れて名の埋れ木の人にしらせん

藤原
貞忠

むかし右大将頼朝公、当国征伐ありし時この所にて、

頼朝かけふの軍ハ名取川

かくよみ給ひしかは、梶原景時とりあへす、

君もろともにかち渡りせん

と下句を付しといふ、

案内の者の覚へ書に有しを写うつ也侍りぬ、

名とり川希になたてそみちのくのしのふの原に露あまるとも

名取の御湯といふは、秋保と称する所の温泉の事なり、名とり川常は歩行渡りの川とみへぬ、鮎の沢山に取れる川なり、所々の瀬に梁をかけてあり、鮎のほる川也、

仙台と岩沼の間に植松村といふあり、此地に弘誓寺と称す寺、御巡見所にて宝物多し、鎮守稻荷明神にて白狐多し、社の傍らに穴ありて、人々穴をのそけ者、深き穴にて口へ赤の飯を備へてあり、願望の人さゝくと云々、

岩沼ハ駅処にて、相馬街道追口の所にして大概の町也、南の町口にある土人竹駒明神と称する社、御巡見所なり、別当を竹駒寺と称す、至て古き所なりと見へたり、此社内には、古しへより白狐を以て鎮守とす、昼中にて小豆飯をして林中におけ者、白狐数々出て食ふ事なり、さも

なくとも白狐あまた住む事にて度々見るといふ、此日ハ大勢群集してさはかしき故にや見へす、何国においても狐を稲荷など々称し、獸類をもつて神とし敬し尊ふ事多し、人ほと尊きものハなきに、獸類を尊ふ事は恥かしき事ならずや、

予按するに、此処古しへ武隈の地なるへし、いかゝの事にて竹駒と称するやいまた詳ならず、古書に古しへの武隈といひし「」の地也と記せり、武隈・竹駒こえの相似たる故に、土人竹駒といひ成へし、見る人考ふへし、

武隈の松、二タ木の松と古しへより二ツの名ハいへとも、武隈ハ地名、二タ木ハ松の名なるへし、今ハそれと名付る松なし、土人に尋れハ、爰の松かしこの松と人々によりて違ふもおかし、云伝ふ、藤原元善陸奥守となり此国へ住たりし時、館の前に植給ひし松なり、帰京して再び下向ありし時、

植し時ちきりやしけん武隈の松に二たひあひ見つるかな

又是より後、源孝義□国ありし時に、なさけありし人のためにて、此松をきりて橋にかけしといふ、いつれの川にかけし事にや、旧地なし、武隈の松の二タ木をみやこ人

いかゝと問は見木とこたへん 橘季通
能因法師、初め当国に下向し此松を見しに、ふたゝひ来りし時は松なかりしかは、

武隈の松ハこのたひ跡もなし千とせをへてや我ハ来ぬらん
古しへ武くまの館と称して、奥州に住したる人ハ、此地に住し給ふことにて、源の満仲・源重之・藤原元善・橘道貞・藤原範永・源孝義等な

り、古哥の事跡こゝに略しぬ、花輪の松の事詳かならず、武隈の松の事なりともいひ、南部に花輪の地に古しへ有しとも□、詮義むつかしく、是も爰に記さす、

岩沼の傍らに、田村隱岐守侯の旧館の地あり、伊達騒動の「」関の城主伊達兵部少輔侯の家滅亡の時、田村候一ノ関へ移り給ひし跡也、今ハ仙台侯の家土古内何かしの居所なり、

笠嶋の道祖神井に中将実方の古墳へは、街道よりハわつかの寄りにて、古しへの街道筋といふ、此処へも行すして、古老案内をまねき尋ね聞し事なり、云伝ふ、藤原の実方下向ありし時、馬上にて社前を通り給ふを、土人止めて田、此社ハ日本武尊の祭り給ひし□□にて靈驗あらたにして、世人願望あれば、男根を木にて作り神前に備ふる時ハ、必ず願望成就□、君も下馬ありて帰京の事を祈り給ふへしといふ、実方諾せず□て馬上に「」時たちまち馬倒れ、実方落馬ありて此地に卒「」といふ、いといふかし、

又云、正四位下右中将藤原実方朝臣、流人として名所の和哥を□つめ哥枕と名付て、長徳四年十一月十二日病ひにて此処に卒す、今墳あり、朽もせず其名はかりを止め置て

一 径幽篁裡 古墳自作蹊 王孫遊不返 千歳草萋々 赤水
郡界、北名取郡長谷村、南柴田郡四日市場村、

土人云伝ふ、有耶無耶の関の実跡ハ、柴田郡より羽州へ越る山中に無谷峠といふ地にて、羽州女鹿村より小砂川浦へ越る所の有耶無耶の関は、古しへの実跡にあらずと云々、何国にても名所の取違ハ「」ある

事なり、何れか是ならん、追て考ふへし、

またはいく、文字も有耶無耶に非ず、牟也牟也の関と古しへ書し事なり、奥羽の二州にては、空の曇りたる日には、今日ハむやくとせし天氣といふ、或は草木繁茂せし林中のうすくらきをは、むやくとせし処といふ、或ひハは深山幽谷の日影くらき谷をも、むやくとせし谷じやといふ、国の方言なり、所によりて、もやくともいふ、牟也牟也の五音に通すれハなり、三才図会に良材集・八雲御抄を引て牟也くの関ハ陸奥出羽の間にありと記せり、古哥に、

武士の出るさ入るさに^{シヤ}栞するおちくどちのむやくの関

此歌いつれの時の人のよみし「ふ事詳□らす、しほりハ□夫深山に入るに、かへる時に道をうしな□さるた□に、木の枝を折」「置いて目しるしとするをいふなり、おちくハ遠近といふを、奥州にておちく□いふ、とちハ何れの土地ハよきのあしきといふに、とちといふ、何れも国の方言にて古哥の解すると、案内の人の云しなり、和哥者流の考もまたあるへし、吾をヲレトひ、爺をテ、といふも方言なり、国々によりておかしき方言は数多ある事にて、古へより伝ふる言語また云誤りし言語もあり、九州肥後・豊後・豊前にては、頑城をキフシといふ、奥州・羽州にてはヲバといふ、松前にては町人の妻をハヲコウといふ、松前にてはメノコシといふ、上方筋にてはワイヘといふ、所々の言ならはしにて伝ふる事、古しへのまゝをかへさるも、又雅なるべし、難波のあしハ伊勢の浜おきのごとし、

大河原の駅と舟廻駅の間に、はゞかりの関の旧跡といふところあり、いまた詳ならず、また大河原の地に紫石の出る地あり、街道の傍にして

上品のむらさき石も出るといふ、硯石になさは赤間か関の処当処の名産となるへし、

二日、大河原駅出立、四里余にして白石城下、三里にして越川、此舟休にて白石へ行戻り白石に止宿、郡の界、柴田郡平村、荻田軍宮村、白石より北一里半にあり、白石は仙台候の臣片倉小十郎の在所にて、城は山城にして高□、往来よりは少し見ゆるなり、今ハ郭数も減して小城なりといふ、□□草ふ□の小家はかりにて「からす、町の真中に小川の流れあり、川の左右白き石数多ある所にて、しら石と地名を称すると案内のものゝいひしなり、他国にてはしら石と称すれとも、土人ハしろ石と称す、

しろ石川、町の北に流る、此辺の水皆々阿武隈川に入て、東々と落流るゝなり、何れも鮭・鮎多し、荻田か嶽ハ街道より西北の間に見る、この節は雪ふりて一山白し風景あり、高山にはあらずと土人はいく、此辺は深山連り、大熊の数多居る事也、他国の熊ハ人を害する事なきに、此山中の熊ハ人に害をなす事にて、深く山に入る事なしといふ、松前・蝦夷に居る熊にはあらず、月の輪のある熊なり、荻田か嶽の南東の野に、古しへよりも片倉氏の牧あり、昔時ハ一年の間には三百も五百も駒を産せし牧なりしに、七、八年以前より山の夫数多生し、牧の駒をとり喰ふによりて、片倉氏よりいろくと才覚あれとも、深山故に制しかたく、駒の産大ひに減せしといふ、白石の産神ハ白鳥大明神にて、祭神日本武尊なり、此故をもつて古しへよりも白鳥をとる事なし、夫ゆへにや此近郷に白鳥の居る事夥しき事にて、目をおとろかしぬ、白石の名産紙子を制す、他国になき上品なり、越川の駅御巡見、是より貝田駅まで僅に廿

余町なり、貝田の駅は六月五日御休となりし、津輕を經、松前・南部・蝦夷界をくるくどめぐりて、此日爰に來りし事也、他國に遊ぶ事彼是と跡先を思ふ事にはあらず、心をひくくして月日をかけて歩行すれば、□千里の「」尽す事ならずや、旅行のころさしある人かならずおこたり給ふへからず、けふの日再びあるへからず、甲冑堂と稱するは、次信・忠信の兄弟の甲冑を着せし木像あり、僅の所ながら行ちかひにて此堂に至らず、ゆかり有し人の建し堂なりと、案内の人の物語のミにて外□ゆへなし、原樫山・経岡・舟岡山・大高か宮、いつれも東鑑に有て、その地名しれす、

郡界、荏田郡越川の駅、伊達郡貝田の駅、

廿日、白石城下へ行戻りにて御止宿、三日、白石城下發足、六里にして角田、三里にして金沢止宿、

白石敵討と稱す浮世本に記せし与太郎(マツ)か東所、逆土村ハ白石城下へつゝきし村にて、志賀団七を討し処の旧地ハ此所なりとて、往來の側也、白石川の河原にて、志賀団七と与太郎か娘二人と敵討のありしといふ事ハ、此地の云伝へもなく虚説とおもはれ侍るなり、志賀団七と云しハ輕き士にて、元來ハ志賀村といふ處の百姓のよし、他方において敵討の有事ハしらす、白石ニおいて敵討のありしといふ事存せずと案内の者の申せしもの也、

郡界、荏田郡大町村、伊具郡高倉村、角田といふ處は在町にて、仙台候の臣石川大和と云し大夫の在所なり、知行一万八千石、白石より經道僅に一里余、御巡見道曲道にて大まはりし、埒もな「」を見る事「」田の原にて阿武隈川を渡るなり、名處記に載し稻葉の渡り、

此川下にありとはかりいふて、其实跡定かならず、古哥に、

風寒く稻葉の渡り空はれて

あふくま川に澄る月影　よみ人しらす

初めに記せしごとく、阿武隈川は北上川には大ひに劣れり、此辺より海へ川の流れ六里なり、十月四日、金津發足、四里にして坂元、二里にして疑倒駒(マツ)ヶ嶽御止宿、伊具郡・亘郡の界ハ明道峠と稱する坂の頂きを以て界とす、此坂中に亀石と号せし長五尺余、幅三尺はかりの岩あり、亀石とはいへとも亀に似たる石にはあらず、土人の物語を聞は、古しへよりも此石中に亀の居る事なりと云伝へし石にて、亀にハ似すといへとも、亀石とて名高き石なりといふ、今年より廿年はかり以前、此處を支配する故人(マツ)、石町彦三郎といひし人、碁石によき石なりとて石匠を招きて、鉄の槌を以て角なる所を少し打欠きし所より水を吹出せしによりて、石匠大ひに驚きて欠石を元の處へ寄せつミて、碁石にする事を止たりしと、案内の者を初め人々は是まで各々云し事也、甚た怪しき物語なり、然とも石中に魚のありしといふ物語ハ、古しへより云伝ふる事にして、すでに江州山田浦石亭にも、水ありて魚のありし石とて、中の空虚の石の片われあり、予則見し石にて、この石のかた(マツ)ハられは九州にて所持する人有との事也、其處を忘れたり、かゝる事もある事なれ者、亀石の中に亀のなきにもあらず、造物者の作ハはかるへからず、あやしきを聞事也、坂元の海辺に仙台侯の唐舟番所有て御巡見處なり、此山より遙に□海をのそみ見るに、浦人のウねりといふ浪、雲中に小山のこどく次第く、に近よりて、海岸に打付る時ハ、其音高く浪の立上るいきほひ筆に尽し

かたき事也、昔時よりも唐舟番所と称して所々にある事也、予按するに、是より東方ハ国なし、唐舟番所の所ハ解しかたし、

尋ね見るつらき心の奥の海に

塩干のかたのいふかひもなし 定家朝臣

五日、駒口嶽御発駕、二里余にして中村城下止宿、駒か嶽在町なり、町口より十八町はかり南仙台と相馬の界あり、塚野辺といふ地也、さて仙台領へ入りしより廿五日目に御巡見すみて、此日相馬領に入りし事なり、其広大なるをおもふへし、仙台の城下より北の方は今に夷風ありて万事異なる事もおほく、行程も五丁沓里、六町沓里、七町沓里なりし風俗なりしに、仙台城下より南方は北方とはかりて、行程も三十六町を以て一里とし、諸事の風俗打かわりて、賤しき万卒までもかしこく見へし事なり、

中村城主^{マツムラノ}当主相馬因幡守候、御知行六万石にて領し給ふの地、凡方十里余、是をさして相馬と称す、差出しの高にて、相馬候の代々知行し給ふ事なり、城は平城にて、城の北方をめくると町に入る、外見要害の地に思はれ侍りし也、案内の者のいふは、土冢市中合せて八百軒余の地と申せし事ながら、予かはかりみる処、都合にして二千五百余軒、大概よき処なり、御巡見使道堀の外堀を通行して、武家町も往来するゆへ土家の模様も見しに、中々嚴重ことにして、武備全きやうに見へし事なり、案内のものに委しく聞しに、此御家にては賤しき小人にても三石・五石の給米にて、地方とりて皆々譜代の者と見へたり、足軽町に小人町も見かけしに、相応の暮しに見へし、制度も正しき体なり、御馳走役として町口まで相馬左衛門といふ大夫の出られしに、武風至てよし、予按す

るに、武家ハ知行の高下によるへからず、武風に論ある事にて、戦国のむかしも思ひ出られし事なり、昔時より小身の士より何の手寄く数ヶ国討とりし例はかるへからず、予六十余万石の仙台の武風には感せずして、六万石の相馬候の武風に感せし事也、尤六、七年以前の凶年より武家大ひに衰へしといふ、土人の物語りながら、さして屈せる体にもあらざりし事なり、此辺の風土は武州に相似たる処多し、六日、中村城下御発駕、四里余にして原町、小高村在町、郡の界、北宇多郡柚木村、行方郡南柚木村、此地を相馬清水といふ、原の町南出はなれより、ひやうく^{マヤ、以下同}とせし野原なり、是を明見宮神馬の牧と称して世にしる処にて、土人馬追ふ原とも称す、長凡三里、幅一里余、芝塘小高く築て、駒を他に行さるやうになし、往来の道には木戸あり、今駒の居る処七百余、かしこ爰に十疋、廿疋ツ、此日も見し事なり、毎年六月中の申の日、馬取の神事とて、其前日より中村より相馬候を初め大夫・諸士残なく原町へ来り給ひ、各々陳そなへの手配りある事とて、或ハ長蛇の陣法、或ハ魚隣^{イサドコ}鶴翼の備をなし、土格は残りなく甲冑を着し旗・さし物を飾り、侍大将足輕大将ハいふに不及、陳大将たる人ハ騎馬武者にて、申の日未明より原に乗り出し、駒を敵となし鯨波の声を揚、鉄炮を放し陳かね・陣大鼓を鳴し、駒を次第く^{マヤ}に追廻し、明見宮の社内に入れて各々乗取事なり、是は古しへよりもある古風にして、太平に住て戦場の意を忘れざる武門の心法にして、駒を取「」高名とし、年々戦場のけいこにて、軍学師範の人ありて、年により陳法同しからず、人々備へ・陳法の論なし、見物興ある事のよし、家中武器のたしなみにもなる事にして、頼母敷事ならずや、此一件、水戸赤水先生の記に委しきゆへ爰に略しぬ、数年^{マヤ}の

駒ハ雨雪深き節はいかゞする事にやと、案内の人に尋しに、寒中ハ稻^{（マ）}もみを夥しく原に入るゝよし、此辺にも山の狼住てまゝ駒をとる事あり、領主より鉄炮打も付置る事なれとも、聞き夜などはいかんともしかたし、馬もりこんなものにて、夜ハ子を真中にねさせて、親馬数々取廻して、かはるゝ番をする事なり、狼馬の子をとらんと思ふ時には、狼馬の側をあちらと走りめぐりて、子を取らん体に見せるゆへ、親馬子をとられしとおのゝ狼を追つめ追めくる也、其時草のしけりたる中へかくれ居る^{（マ）}、親馬の側を放れしを見て飛かゝりて、二疋してくはへて逃るよし、是をもつて見れハ馬の智ハ狼に劣りし物と、案内の物かたりなり、予按するに、人におひても悪事をなす事ハ、案外なる大智あるものにて、善事に智なきものあり、是とても心をよするとよせざるにあらんか、人と獸□ひとしきにはあらざれとも、犬ハかしくて盗をするにうとく、猫はうときものにて盗をするにかしこし、おかしきものならずや、

七日、小高村御発足、十二町にして高野村、五里五町にして□岡止宿、此辺に來りては相馬領あしゝ、郡界行方郡、標葉郡高野村南にあり、標葉郡・檜葉郡界に相馬領と御領との界にて、すなはち界川^{（マ）}といふあり、又、此辺にては案内の者郡界を知らず、北相馬、南ハ岩城とはかりいひて郡界ハしらぬといふ、いかんともなしかたし、

八日、富岡御発足、七里半余にして磐城郡四ツ倉、平の城下止宿、檜葉郡と岩城の界は四ツ倉の北二町にあり、此日の通行ハ、東の方ハ大海にて海浜は大浪打よせて危きによりて、坂道を通して道あしく、北廻^{（マ）}村八幡宮御巡見所なり、此社ハ四ツ倉より廿町余りに、古跡所にて

源頼義・義家の建立といふ、宝物色々の武器あり、中にも太刀一振、弓一張、矢の根二本、鞍骨一矢、是ハ至て古く見へて、むかしを思ふ情ありて、扱御巡見使いまた御社参なきに、一里もまへより案内の者より申上しは、昔よりも此八幡宮御巡見ありて宝物御覽あれは、一点の曇りなき晴天にても、大雨の社中へふることゝいふ、昔はさもあれ今日におひてハ、雨のふることいかゞあらんと信する者也しに、案内の者のいひしことく御巡見使宝物御覽の内より、華表の近所へ雨しきりにふりし事ゆへ、御巡見使□はしめ人々ふしきに思ひて空を見れハ、晴天にて雨のふるけしき更になし、鳥居の左右大樹大に繁茂して空をおほひ、地中より水氣をのぼせて、大樹の枝よりして雨のふるこゝ「雫の落るこ」となり、古木によりて水のぼりて雨のことく雫の落るといふ事ハ、先達而聞し事ながら、今面前二見し事なり、別当を満蔵院と云、神主を猪場出雲といふ、四ツ倉の町より十町北に薬師堂あり、徳一大師の開基にして、大同年中の建立といふ、此地を横瀬村といふ、大海のうへのそみし処な□、いまた御巡見なき内に、案内の者のいはく、此堂御巡見の節は、古しへよりも御同勢の中に一人は失せ申事と怪しきをいひし故に、人々ふしきなる事をいふかるとて、憶病なる人ハおそれしもおかし、辺鄙には埒もなきいひ伝へも有事なり、宝物色々あり、爰に略しぬ、

此海面にては鯉魚を数多とる事にて、節となし東都に廻す事なり、四国路より出せる鯉ふしとちかひて味ひ大ひにあしく、あら海ゆへにや、やゝもすれは漁舟の破船ありて死亡する事ありと土人の物かたりなり、此辺に來りては山浅くして大河なし、谷川は多し、鮭・鱒・鮎何れのも川にても梁にて数多とる事也、

郡界、岩切郡、岩崎郡、

鎌田川、舟渡しにて大概の川なり、此処を鎌田村□いふ、平へ八丁なり、此辺にては郡界定かならず、案内のものしら「馬・岩城の惣名のミを称する事也、

平は安藤対馬守候五万石の御城地なり、昔時ハ岩城氏の領し給ふ処にて、岩城と称する地、凡三十余万石、岩城氏一円に□地となし、歴代の諸候なりしに、ゆへありて僅に二万石を給はりて、羽州亀田へ所替ありし事也、此時の領主は岩城忠三郎貞隆といふなり、そのうち城主数度替るといへとも、古しへの方にも残り中々よき処なり、飯野八幡と称する社地御巡見処にて、此社城の南にあたり、城の外郭に入りて、城きはを通行して参詣す、夫ゆへに城の模様大概に見ゆるなり、山を開きて城とせし所にて、広大なる城に見へしなり、石垣のある処は、小ながら切岸数丈要害の城なり、此節楓木紅葉して風景尤よし、飯野八幡の社は城南八町にありし、頼義御建立、其後世々御領主御再興ありて今ある社至て念の入れし社なり、宝物に武器多し、中にも正真の貞宗、三尺余の太刀、長刀の身の四尺余ある大長刀二振、鎗の四尺余の身二本、至てきやうさんに見へ侍りしなり、頼義のミつから持玉ひしといふ弓矢あり、何れも珍らしきものなり、奉納物に作りし器と見へたり、此地岩城郡にて土人岩城平と称す、町の南口に橋有、川にかけし橋にはあらず、此処大沼にて往来自由ならず、此故にかけし橋なり、城要害の大沼と見へしなり、鎗の類義家の時あるへきやうなし、後世の奉納なるへし、

九日、平の城下出立、浜辺四里、山道五里、小名浜・植田止宿、平より

〔插图①〕

南一里湯本の町、大概の処なり、此地には温泉あまたにて、家々に湯壺あり、入湯する人も多く湿瘡毒に功ある湯なり、当国名所記に、

夜とともになけかしき身を陸奥の

三箱の御湯といはせてし哉 大納言師氏

此処の事なるにや、いまた詳ならずといへとも、外に名つくへき温泉の所なし、予か国□足守の産平二郎といひし将基に名を得し者、此地に久しく居住して去末の年死せり、その跡今にありて、遠く至りては国の人といへ者何となく床しく、墓などへも手向して行過ぬ、

手向せん露おく草の夫ながら

十日、植田在町御發駕、三里にして上遠野止宿、植田より南一里に郡界あり、北磐井郡西川村、南菊田郡瀧尻村、泉川の瀬尻川ともいふ川の中を以て界とす、此処より世にしろ勿来の関へ僅に一里、委しく尋聞しに、今ハ名のミにて風景もなく、古しへ常州・奥州の界の関ありし旧跡といふのミなり、

東路のかたになケその関の名は

君をミやこにすめとなりけり 頼朝公

東路のなこそその関も有ものをいかてか越て来ぬらん 慈鎮

奥海常山至此方 清風万里弘辺雲

山桜夾道関門跡 憶昔詠哥源將軍 源師賢卿

右の旧地へはゆかず、

泉、此処は本田弾正少弼候一万五千石の御在所にて、植田よりハ一里余の処にて往来より見へす、町ハよろしからずといへとも、当君ハ当時

御側御用人にて賢君の聞へあり、夫故にや、百姓のもやうさして□する体なし、然し土地はあしき所なり、

十一日、上遠野御発駕、四里余山道なり石住、三里にして竹貫在町、すへて此辺の風土あしく、東方の海にて漁方多し、郡界、菊田郡東松川、□川郡西北川、小河有、石住より二丁余、世に岩城紙と称する紙は此辺より出る事なり、紙の名ハ岩城といへとも岩城にては製せず、菊田郡にて夥しく製する事なり、予諸州を廻りて見るに、何れにても其処に産物のある地ハ、何としても民家の体よし、経済の役人ハ心ありたきものなり、竹貫より三春へ八里、白川へ十四里、棚倉へ二十里、所々の追分也、十二日、竹貫御発駕、二里半にして室木村に方解石多し、至て大石にて欠とる事也、一里余西二浅川といふに越後高田榊原侯の役処なり、此辺に御知行所多し、棚倉城下より十町余東におたね人参を夥しく植るなり、棚結びまはし、御用人参を植る所に書し札所々に建てあり、近世おたね人参の功なき事を人々知りて用ゆる者の稀なる故に、此所の人参を植る田畑大ひにあって明地多し、今植てある処僅に一町ばかり、植やう製しやう爰に略しぬ、何としても功うすき人参といふ、棚倉は小笠原岩丸候六万石の御城地、城は平城にして要害の地と見へす、然れとも此所は八面に小山ならひ立、敵をふせくにたよりよ□□に思われ侍りし也、市中は上方すし・中国すしの城下に違ヒ、草□ふきの家居に見くるしく、六万石の城下とハミへす、五月十一日、御巡見ありし関山へ、棚倉より僅に四里、白川の城下へ五里少すこし余なり、くるりくゝとめぐりて、又爰に來りし事なり、棚倉川といふ歩「」渡りの川あり、是よりの水ハミなく常陸の国へ流れ落る事なり、

十三日、棚倉城下御発駕、東館、下関止宿、棚倉より南一里に近津明神の社、御巡見所なり、此処を八挽村といふ、人皇十一代景孝天皇の御宇の建立にて旧地といふ、よき社頭にして別當を大善院といふ山伏なり、神主は阿部和泉とて、宝物に義家の甲冑阿部貞任討死に帶せし太刀とて、古き三尺余の太刀ありしなり、棚倉に蓮性寺といふ一向宗の寺あり、此寺の開基は畠山重忠の三男重秀、出家し親鸞上人の弟子と成て此地に住す、夫より血脈絶すと土人の物語也、

十四日、下関発駕、是より三里常州、大中村休、太田村止宿、下関より南一里に両国の界あり、堺の明神と称する少しき社あり、是より北は奥州白川郡大汎^{スカリ}村、南ハ常州多河郡徳田村なり、御巡見使三所とも此処にて御巡見の処々、滞りなく相済て御よろこひありし事なり、

〔挿図⑫〕

和漢三才図会・増補日本行程記、此外一枚図とせし地図に行程などを引合せ見しに、大違ひの処多し、板となして世に弘む□書は大概に改むべきを、埒もなき事を記して人を欺く事不審の事なり、此処の大ぬかり村^(マツ)と何れの板にも常州と記しあ「」、然れとも奥州に違ひなし、両国の界に水戸公の家士御馳走役として出迎ひたまふ、至て厳重の御あしらひなり、扱常州に入れば上国の風に見へ、人家のもやうもよく、百姓の妻子に至るまでも賤しからず、作業も出精すると見へて、作物も見事にて、土を見て礼をせざるハなし、小兒に至るまで平伏して無礼の体更になく、御巡見使御通行によつて新に□仰付もある事ながら、かね／＼政事正しからぬ所にては俄にならふ故に、終には不礼もある事にて、国の政事正しからざる処の他国の人もしる事ながら、常州においては貴

賤不礼の体更に見へず、予按するに、光圀卿世に知られたまふ賢君にて、国をおさめたまひし事あまねく世人のいふ事にて、此君の御遺風にてかくまでもきはたち、奥羽に勝れて見ゆる事なりと、人々評判せしほととなり、当君も東都におひて賢君なりと称誉する君なり、


太田村の北二里に河内村といふあり、此地に玉簾の瀧と称する滝あり、玉簾寺といふ寺あり、古跡所にして風景ある処なり、

夏山に落来る瀧の玉すたれかゝる所や涼しかるらん

此哥は光圀卿の御詠と土人のいひしなり、

東路や朝の空は近からてその名床しき玉簾の瀧

古松軒

此辺の川々に鮎魚多しと味ひもよく名物なり、リツと云所別してよし、久慈郡太田といふ処は、水戸君の上大夫中山備前守侯の御在所なり、御巡見使御門前御通行ゆへにや、門の左右に〔挿図13〕かくのこくくの紋付し坪幕数々打廻し、諸士のかたく大勢御馳走とし□出むかひありし也、其体甚た嚴重に見へし、此地は昔時佐竹氏代々の御城地にして、大ひに繁昌せし所なり、此故に城も要害の地と見へし事なり、今櫓もなく城門もなき故に、□なく

〔挿図14〕

見れハ城とは見へぬかまへなり、佐竹左中将義宣の時に、故ありて羽州久保田へ所替にて知行も減せし事也、事永き故に爰に略しぬ、太田の町千余軒、大概の処なり、

是より西八町に西山村といふ勝地あり、此処は中納言光圀公御隠居ありし所にして、此君の賢徳は普く世人のしる事にして、西山遺事と号せし書に粗其徳をあらわせし事なり、今に久留寺と称する寺に光圀公御束

帯の像を安置ありて、寺領五百石、学坊も数多にして、奥の院にハ御法名の像あると土人の物語なり、太田の北に瑞龍山といふあり、此所ハ水戸公御代々御墳墓の地ニしてよき寺にして、舜水先生の墓もある事なり、また西山への□に桃源橋と称する橋あ□て、桃の林大ひに繁茂し名高□処にて、近き年奥州守山侯より碑石を建給ふとの事なり、此辺拝見処数多にてしきりに行見る思ひ生せし事ながら、御用先の身にて行事ならず、光圀卿・舜水先生の徳は海内にてしらぬ人なし、その事跡ある地へ僅に八町といへとも、心にまかせず生涯の残念なり、爰においても九州一見に下りし行脚の体こそ頼もしけれ、

十五日、太田御発足、五里にして枝川休、二里半にして長岡止宿、太田より南一里、久慈川流るゝ、舟渡しなり、奥州白川郡より流おつる、此辺の百姓家いよくよし、此せつ稲をかり入るゝ時節にて農業の体を見るに、国の風俗にて婦人かひく敷、小児に至るまで業を大切に勤る体也、宿々におひても御巡見使の事なるゆへに、念の入たる料理なども賤しからぬ取組なり、兎角味噌・醬油の味ひあしきに人々こまりし体なり、云伝ふ、光圀卿の御時代より、民の奢を大に制し給ひ、分外の暮をする百姓あれはきひしく罰し給ひ、奢らすして家業に出情する百姓は、案外に賞ひ給ひし事にて、友吟味にして互に奢の道をかたく慎しみし故、いつとなく国の風俗となりて、今にては味噌・油の味ひよきを食する百姓は奢り者と云ふらし、是等の事をもつて万事を思ふへし、頼もしき風俗なら□や、

此辺より、さゝ石・鼈甲石□称する奇石の出る山あり、街道よりハ一里の寄りなり、

常州は北方には小山連り、太田へ出るまでハ山の間を通行する事なり、山畑には綿作を度々見かけし事なり、八月頃より冷氣ある風土にて、心よく綿のもゝ口ひらかす、夫ゆへに綿木を根ぬきにして、柵を結びて夫に綿の木を逆さまにし、日おもてに置いて綿のもゝ口をひらかすよし、一反にやうく綿五貫目はかりとると云々々、^(一)

枝川より太田へ五里、枝川此処にて町の南に川あり、中川と称して常州第一の川といふ、水上ハ下野国奈須山より流れ出る、此所にては戊亥より辰巳のかたへ落流るゝなり、此川水戸城の北の岸を流れ要害の川なり、川を過れハわつか八町にて水戸の下町といふに入るなり、去々年の大水に町々大ひにいたみ、往来筋草ふきの家あまたにて、上方筋の城下よりもおとりし事なり、上町と称するも下町に同じ、世に東海道と称するは、伊勢の国鈴鹿よりはしまり、奥州・常州の堺^{ナゴ}来^コの関にて終る事なり、

海内を日の本と称しはしめしも、いにしへ常陸国を日立と書て、海内東方のかきりなり、是によりて日の本とも称せしを、いつとなく海内の名とせしものなり、むつかしく理つめを□あらはせし書にあるまし、後人の作説ありて、かゝる云伝への埒もなきやうの説には実事のあるものなり、日本の風俗ならん、予か信する事とて爰に又書くはふるものなり、御城ハ聞しよりも大城にて、中川御城の北は岸をなかれ、大手は千波の池とて大沼をもつて要害とし、風景もよくて中々よき御城と見へ侍りしなり、遠見ながらも郭内広太ならん、予かはかりなす処なり、外に一枚図あるをもつて爰には略し侍りて、風景を図するのミなり、

枝川の休所へ藤田熊之助、予を防^{へま}ひて菓子など持参ありてねんころの

挨拶あり、是は春方、紅毛の机覆ひをおくりし謝義にや、

〔挿図⑬〕

□深切のこゝろさしある故の事うれしくおもひし事なり、今度はしめて対面せしに、人物至てよく、未十五童ながら聞及し才子にて、万事のふるまひ・言語さはやかにて大人のことし、赤水先生^(一)の物かたり有しも、

熊之助事ハ十三才の時より文章詩作、草稿なく筆をとるより終りに至るまで、平生の人の俗文にて書状を書かことし、古今かくのこときの童子をいまた聞す、水戸公の御物かたりにも、中華の王勃十三童にして滕王閣の文を書す、熊之介も十三才にて文章をなす、是をもつて思ふに、和漢右の二童子のミならんと宣し由、驚き入りし人なり、予より奥州津軽・合浦にて拾ひし舍利浜^{毎衣月口といふ}の玉を五十はかり送りしかハ、よろこひ□体に見へし、十五童ながら風雅もありて、南部・津軽・蝦夷・松前の物語を尋られし事にて時をうつしぬ、かくて尽せざる事ゆへにせひなくわかれし事なり、何とて互に名残を思ふ風情なりし、

十六日、長岡^{太極の町}御発駕、五里にして府中休み、八里にして牛久止宿、永々敷旅中故にいろくゝの事もあるものにて、十五日の夜九ツ時、長岡の町出火にて御巡見使も外へ御退、水戸公より御馳走役として付添ありし宿所も焼亡して、上を下へと騒動せし事にて、うろたへし人もありておかしき事もありしなり、新治郡府中ハ水戸公の御連枝播磨守候二万石の御在所二而、大概の町なり、水戸よりハ街道筋の人通りもあまたにて中々淋しからず、江戸近所なるゆへに風俗も江戸のことく、先達而聞しは、世に水戸言葉と称し、鼻声にして解しかたきといひしに、夫ハむかしの事にて今ハ往来筋の言語ハ江戸のことく、尤在々へ入りてハ鼻声の

言語もある事なり、一国のうちにてても言語のかはりある事ハ、常州にはかきるへからず、いつれの国にてもある事なり、

常州も西北の方は筑波山につゞき、奥州下野の方にて、屏風を建しやうに取まはせし国也、筑波山をは街道より西の方へ見□、北の方を見る□風俗のかはり大ひにて、さしての高山□ハあらされとも風景ある山なり、此処へハ夏参詣して別書に□ゆへに爰に略す、筑波嶺、水名野川当国の名所とす、和哥多し、ここに略せり、

筑波山の権現、祭神詳ならず、土人稻村権現と云、予按するに稻荷明神なるへし、和漢三才図会に、桓武帝の御宇、徳一上人の開基とあり、然しなから、三才図会と称する書外の事ハしらす、地理行程、寺社の事ハ大ひなる違ひあまたなり、予諸州にてあはせ見て其違ひをしれり、何となく昔集めし書なれハ、ことくく委しからぬ事ハ尤の事なり、

此辺の街道筋は平地にして、畳を布しこときよき道なり、牛

〔插图⑬〕

久といふ処ハ、山口修理亮候の一萬石の御在所にて、町もあしき処也、是より東の方ハ広大もなき原なり、上方・中国筋とは大ひに違ひて、草木ばかり生せし野原は、かしこゝにある事也、国の大ひなるゆへなるへし、

十七日、牛久御発駕、六里余にして我孫子^{アヒコ}休み、千住止宿、常陸と下総の界は藤代と鳥手の間にあり、世に坂東太郎と称する大河は、我孫子の北に流るゝ、水上は上野・下野の川々落合ひ、武州利根川と栗橋の下より股となりて此処へ流れ入りて、城州淀川にもおとらぬ大川なり、川舟にても二百石積の舟通行「」、小金と称する処には公儀の御牧場

ありて、これを小金原と称し、南北にめぐりて長サ三拾六町、道にて凡四拾里、横にては一里の処もあり、二里の処もありて、往来せる処ハ僅に十町、二十町ばかり、此日も数多の駒を見かけしなり、此原に今居る馬数三千余匹と土人の物語りなり、関東ハ何れの国も広大にて、かゝる原野のある事なり、其ひろきを思ふへし、小金二里松戸の駅、此地にて川をわたる、是も利根川の末にて水上は武州の西、上野の界より流れ落る事にて、此川をもつて下総と武州との界とせり、川のわたり上りに御関所あり、此日遠道にて、やうく夜の九ツ頃に千寿^{チマ}の駅に着す、明日は江戸入りして、皆々悦び大ひなりし事也、十月十八日、千寿まで二子をはしめ、なしみある人々迎ひにきたり、互に無為なりしを悦び、四ツ時東都自勝堂に着し筆をとゞめ侍りぬ、

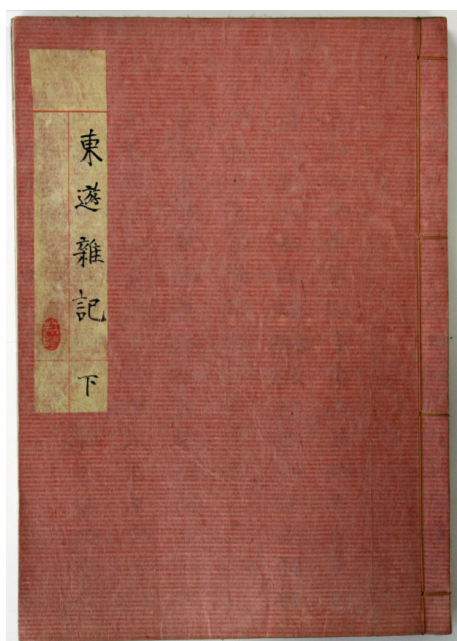
予再び爰にかへりしに、旅行せし日数爰に帰らず、何国にか行しと暫く手を拱き、つくく我身の上をかへりみれば、六そしあまり過にしハ、たゞ夢のことく猶幾としかあらん露の身と、我ながら哀れを催し、忙然として世にある事、草木とひとしく甲斐^{マイ}ひなき身のかなしかりしに、いかなる御恵みにや、恐れ多くも御殿において賤しき僕か名を称し給ひ、小笠原若州賢君の御伝へありつゝ、大執政白川源公の御館に召れし事数度に及び、終に此記行を賢君に備ふ、まことに生涯の面目此うへあるへからず、且ハ心を磨くたねともなり、有かたきかすく心魂にてつし、悦ひつゝむにあまれりと恐れあるもかへりみず、其恵みのありしを爰に記し置ものなり、于時寛政元^己西季夏、橘辰、行年六十三歳識、

古川辰備中岡田村人、称平二兵衛、号古松軒又子曜、倜儻大略、少時好地理学、浪遊海内、南海・北陬無不到、執筆写地勢、尤好尋戰爭古跡、著図説、以鉤肱法度高低・遠近、無生尺寸誤、不屑食祿、閉門、著書以終世云寛政年間人、本書以外之著書、西遊雜記・九州勝景図・四神地名録・八丈島筆記等、古国書解題所説、尚写本五卷、本書係古松軒自筆、存二・六卷而已、且毀損甚矣与妻協力、補装為三卷珍藏、

昭和己卯夏日 荒晴山門識印

【挿図】

〔「東遊雜記 下」表紙〕



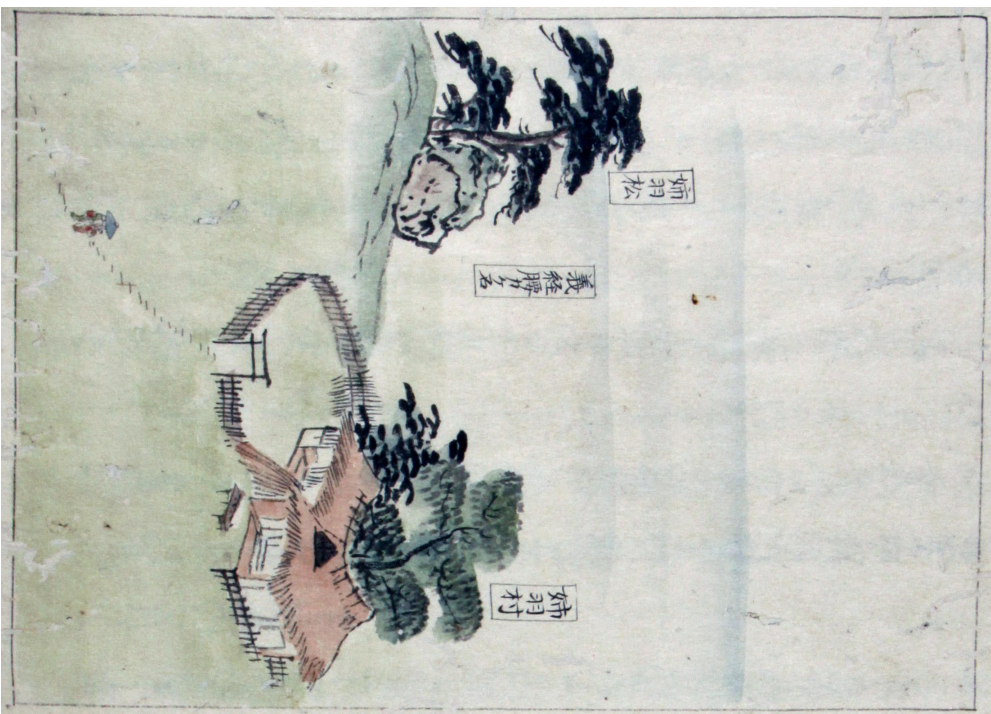
〔挿図①〕

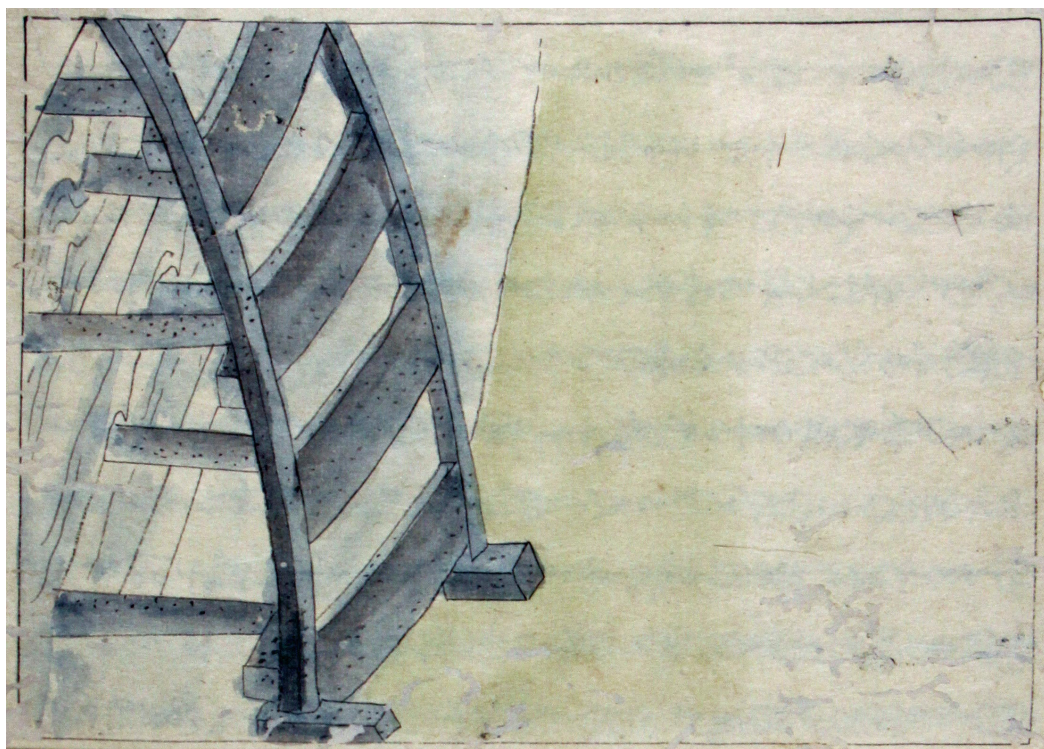
右「桜清水」 左「秦衡首塚」



〔挿図②〕

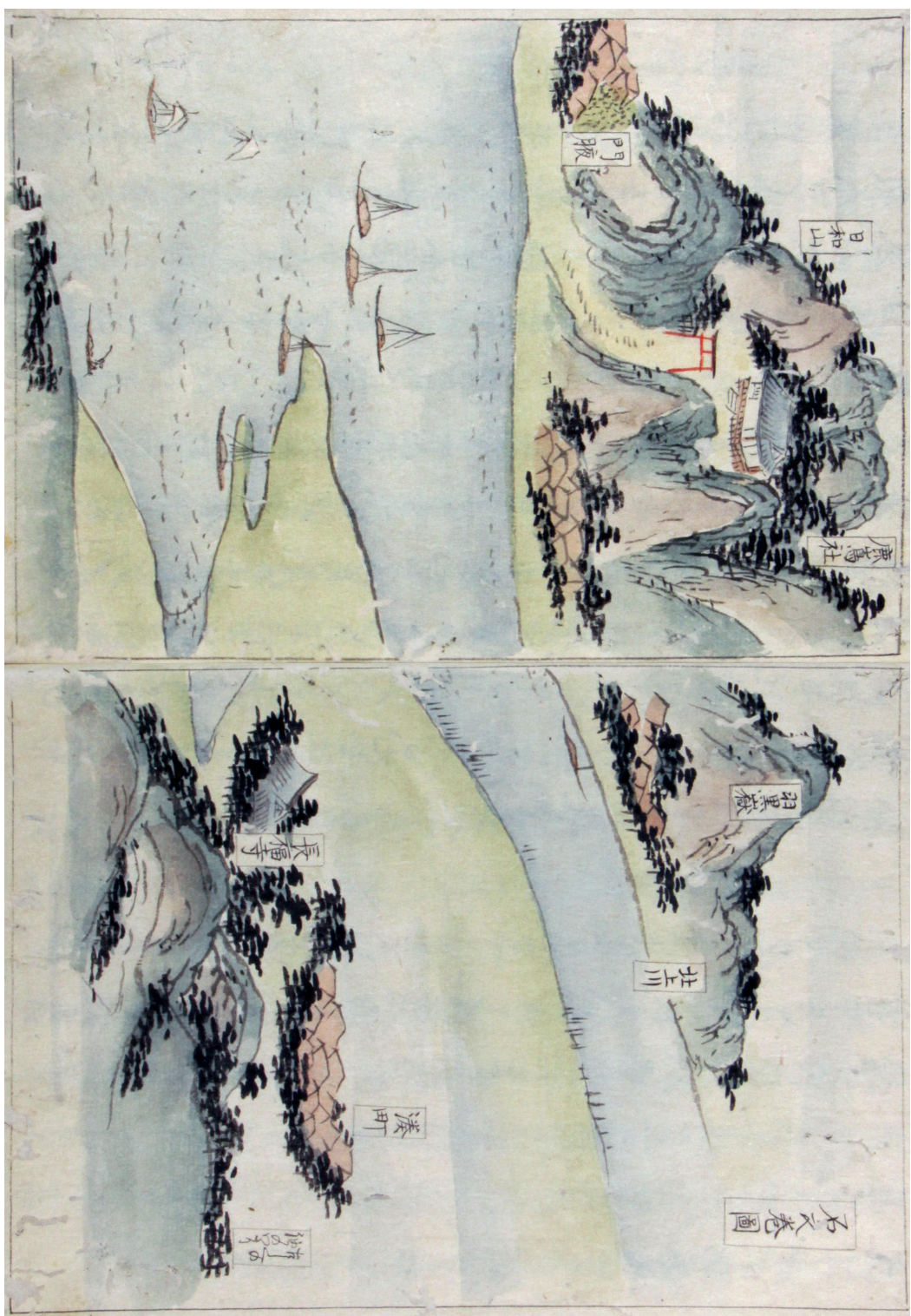
右「姉羽村」 中「義経腰刀ヶ石」 左「姉羽松」





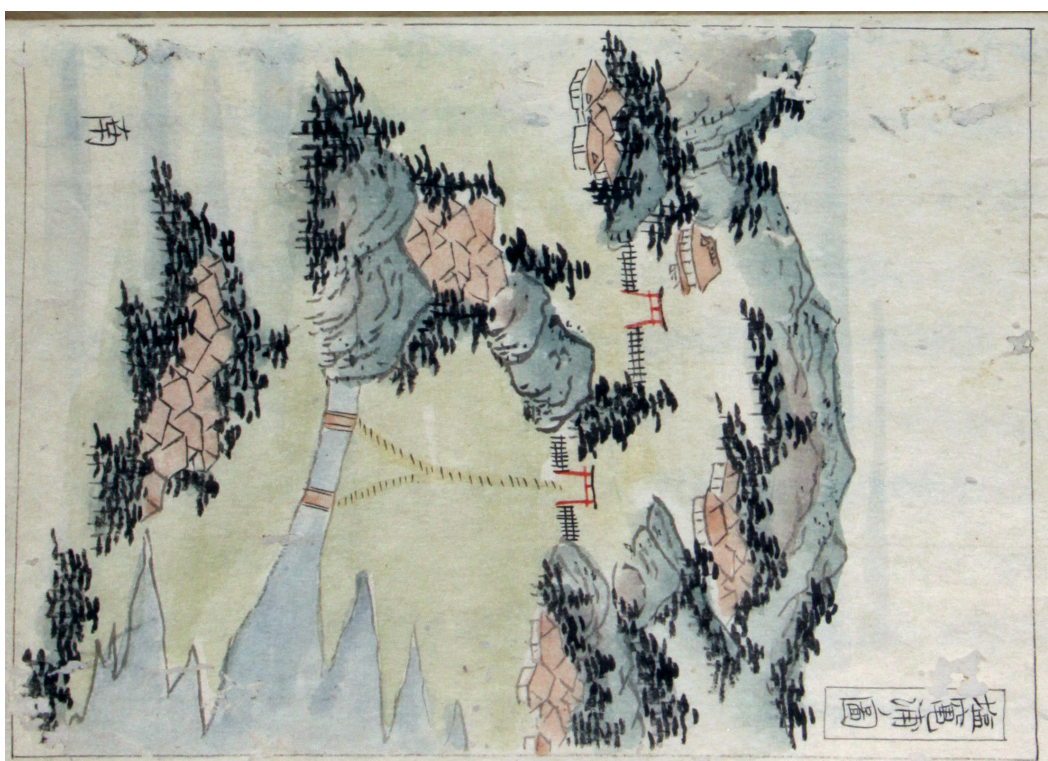
〔圖〕

〔挿図④〕 右上段右から「石之巻図」「北上川」「羽黒嶽」
 右下段右から「湊町」「長福寺」
 左上段右から「鹿嶋社」「日和山」「門腋」



〔挿図⑤〕

右「塩竈浦ノ図」 左「南」



〔挿図⑥〕（翻刻文中に掲載）



〔圖〕